

岐路に立つ知のあり方とそのこれから

－ 若手シンポジウムの報告と総括 －

Knowledge at the Crossroads Now and in the Future
－ Report and Summary on the Young Researcher Symposium －

大倉 茂
OHKURA, Shigeru

総合人間学会第14回研究大会の2日目に若手シンポジウム「岐路に立つ知のあり方とそのこれから」が催された。本稿につづく、3つの論考はそのシンポジウムの報告論文となっている。本稿は、その若手シンポジウムの趣意を紹介し、それぞれの報告論文の若干の紹介をすることを通して、若手シンポジウムの報告と総括としたい。

現代社会は、しばしば閉塞や先の見えないといった言葉がその形容語として使用される。多くのひとが、さまざまな場面で、行き詰まりを感じてのことと考えられる。

そういった行き詰まりを抱えていることのひとつに、知、その拠点、そして知の流通のあり方があるように思われる。一方で、反知性主義など知性、あるいは知それ自体、ないしは知識人への不信感が顕わにされ、他方で人文学軽視の風潮の中で、知のあり方が根底から問われている。このように知のあり方が揺さぶりをかけられていることと連動しつつ、国家の財政問題との関連の中で知の拠点としての大学の変容が迫られており、同時に「出版不況」とインターネットの普及の中で出版に支えられてきた知の流通のあり方にも反省が求められている。

そこで今回の若手シンポジウムでは、過去に知のあり方の見直しのようなことがなかったか、これから知はどのようにあるべきか、これからの知の拠点はどのようにあるべきかなどの問いを考えていきたい。

徳重公美による「荻生徂徠の学問論と知の獲得について——共同読書の場合としての「会読」を手がかりに——」は、討論の場である会読が主題である。一方的な教授法とひとりの世界に入ることのどちらも批判する荻生徂徠を取り上げる。特に、恣意的な解釈を回避する場としての会読を取り上げることで、現代的な知の手段化ともいえるべき状況を批判的に捉える報告であった。

小林加代子による「福沢諭吉の学問観——「実学」を捉えなおす——」は、福沢「実学」の捉え直しが主題である。丸山真男は福沢「実学」における精神の改革をその革新性と見るが、福沢「実学」は、「物事の道理を求めて今日の用を達す」ことを目的とする。「すぐに目に見える目標を掲げてすぐに現れる結果を求める傾向は本来の学問の成果ではない」と結論

づけ、学問の手段化を批判する。

最後に、堀内友博による「J. デリダの「大学」論——カント読解に焦点を当てて——」は、デリダの大学論が主題である。「国民に強力で持続的な影響力を持つ手段」である上級学部と、「学問自身の利害関心しかもたない」下級学部の対比を踏まえて、デリダは『哲学への権利』では「(哲学部は) つねに何かに奉仕する可能性を秘めている」という。そういった流れにおいて、上級学部と下級学部との争いによって学問の展開がなされるというのが堀内報告の結論と言えよう。

本稿も含め、以下に続く、三者の論文が先に挙げた現代社会における〈知〉をめぐる問題にどれだけ応えられているかについては読み手である皆さまの判断に委ねたい。しかしながら、総合人間学会として第 11 回研究大会のフォーラム、第 13 回研究大会のシンポジウム、第 14 回研究大会のシンポジウムと〈知〉にかかわる議論が続いている。個別の報告はそれぞれなされるとしても、本若手シンポジウムの一連の報告がこれまでの議論の蓄積を反省する機会となれば幸いである。

[おおくら しげる／立教大学／哲学・倫理学]